リリー・マルレーン

歌手ララの愛と人生

下

ララ・アンデルセン　辻 優子訳

リリー・マルレーン

歌手ララの愛と人生

下

ララ・アンデルセン　辻 優子訳

中央公論社

LEBEN MIT EINEM LIED
by
© Lale Andersen
Copyrights in Japanese edition by
© CHUOKORON-SHA, INC., Tokyo, 1981
arranged with
Deutsch Verlags-Anstalt GmbH, Germany
through Tuttle-Mori Agency, inc., Tokyo

The narration on which the Motion Picture LILI MARLEEN, a Roxy production of Rainer Werner Fassbinder, was based.

ララ・アンデルセン
リリー・マルレーン（下）　©1981　定価1000円
昭和56年9月5日印刷　昭和56年9月15日発行　検印廃止
訳者　辻　優子　発行者　高梨　茂　印刷所　三晃印刷
発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替　東京2-34

下巻　目　次

地下を行く　5
生きながらえるために　77
北海へ平和の訪れ　148
ああ、ヴィルキ！　208
訳者あとがき　239

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

リリー・マルレーン　下

——歌手ララの愛と人生

地下を行く

ヒトラーの影　ユダヤ名前　戦争が始まった　国防軍慰問巡業
グラウゼ氏の星占い　ファンレターの山　ヴァイゼンボルンの地下組織
ワルシャワへ　ヒンケルの横面　イタリアへ

情熱はいつでも
理性よりも二歩早い。

燃えるような紫色の藤の花を身につけて、古い家壁がはにかみながら見栄をはっていた。老婦人たちが下の湖辺の日なたにすわって、縁のついた鮮やかな絹のきれをまとっているのと同じような光景だった。聖ピエトロ・パウロ大聖堂の白い鐘楼には、青い文字盤が輝いて、金色の針がゆっくりとふるえながら動き、どの一秒もどの一分も、過ぎ去るのが苦痛のようだった。どこの庭園にも、ミモザや、しゃくなげや、野ばらの花が匂い、広場の喫茶店の前の椅子には、人々が笑いさざめいていた。

「〈ふね〉に行って、グラッパでも飲もうか、ヴィルキ？」

「部屋にはないの――？」

「グラッパはあるよ。でも知りあいのびっくりした顔を見たいからね。みんな何週間も、ぼくがウラジミール・フォーゲルのそばで神妙に暮らしているのを見ていたんだ。みんなの目が、もの

問いたげに向けられてくるだろう。どうしてこんなことになったんだ、突然なにか蜜蜂のように黄色いものが、ゴットハルト峠を越えてとんできて、蜜蜂のもっている確かな本能で、迷うことなくあわれなメンデルゾンの腕の中へ飛びこむなんて、と」

「蜜蜂が蜜を集めてまわることと、わたしがせっせとお札を集めてまわることとのあいだに、何か連想の糸がつながっているのなら、わたしはあなたの夢をさましてあげなければならないわ――わたしはためこんだ三千五百フランを、明日は自分でチューリヒの州警察外国人課へ持って行くつもりよ」

「怒らないでほしいけど、その考えは特にすぐれているとは思えないね。三千五百フラン！　それだけあったらミヒャエルを連れてきて、このアスコナで半年黙って暮らせるよ。半年たつうちにはチョビひげが、きっと計画したとおりの戦争をおっぱじめるだろう。そうしたら敵も味方も目をさまし、あのさもしい独裁者に厳罰を加えて、どこかの強制収容所にたった一人のお客として一生涯閉じこめてしまい、また昔の美しいドイツへの国境が、もとのように開かれるだろう。そうなればわれわれもまた、自分の生きがいに打ちこむ時間が与えられ、きみとぼくは、演劇と音楽が何を意味しているかを追求できるようになるだろう」

「うちのお父さんの船客の中に、あるときとても魅力的なアメリカの老婦人がいたわ。未亡人で子供がいないの。六十歳だったけれど、腎臓が悪いので、せいぜいあと二年しか生きられないってお医者に言われ、それじゃあ急がなくちゃならないと、一番きれいな客船の、デラックス船室を二年間予約して、自分の家の庭師と、長いあいだ勤めてきた料理女にも、船室をとってあげ、

ほんとうに二年間のうちに、全財産を最後の一ペニーまで使い果してしまったの。『いったいどうなってるの？』と彼女はすっかり腹をたててお医者さまにたずねたわ。『わたしの計算は一日も一ペニーも狂わなかったわ。であなたのほうの計算は？』父が働いていた船会社は、この人をスチュワーデスにやとって、ずっと船に乗ってもらっていたわ。親切で楽しげで、船酔いに強い人だったの。そして」

「――そして、もしも彼女が死んでいなかったなら、今日でもなお彼女は、七つの海を泳いでいることでありましょう」

「――そして、もしも彼女が、わたしがあなたがたの戦争予言を信じないのと同じように、お医者さまの予言に対して懐疑的であったなら、彼女ももっと賢くふるまえたでありましょうのに、っていうわけよ。だってあなたがたときたらもうここ五年来、いつもいつも戦争が起ると言ってるじゃあないの。わたしがつらいのはただ、借金を負っていることだわ。年をとるにつれて、ますますそれがつらくなってゆくの。あなたとはわたし、見方がちがうのよ。素朴すぎるかもしれないし、流行おくれかもしれない。でも、わたしのことを信用してくれた人たちを、黙って見殺しにするというのは、どうしたってよくないことだわ」

「きみの考えの北ドイツ的なきちょうめんさで、ぼくに風邪をひかせたくなかったら、この美しいテッシーンの春の宵の暖かさの中に、もどることにしようじゃないか」

わたしたちは広場をわたって、黙ったままレストラン〈ふね〉の前にすわった。期待した成果はあがらなかった。ローベルトの知り合いが前を通りすぎていったが、隣にすわっているみすぼ

らしい女には目もくれなかったし、立ちどまったとしても何か無意味なことを口にしただけだった。わたしは指の爪をほじっていたが、グラッパを一飲みするごとにますます憂鬱な気分に沈んでいった。ここ数ヵ月来経験のないことだった。わたしに与えられた人生は、まさに駆けめぐってツルツルになった靴底だったし、上気した顔だったし、早い頭のめぐりを必要とする対話だったし、リハーサル、出演、喝采、空腹、疲労だったし、夢も見ない眠りだった。ここの明るいラゴ・マジョーレは、わたし向きではなかった。それは今日でも六年前にヴィドマー氏が、ヴァレスカとわたしにはじめてこの地を紹介したときと少しも変ってはいなかった。心配を知らない人人のためにある場所だった。そして、この心配のなさに、まっとうな理由があるかないかなどということは、まるで問題にならないことだった。「愛しあっていても、こんなに遠く離れて暮らさなければならない上に、住んでいる二つの世界がまったくちがっていれば、二人の考えがまたびったりするまでに、何日かかるのは当然だよ」といってローベルトは、わたしの憂鬱なもの思いを追いはらおうとした。

わたしたちはエルンスト・ドイッチュや、エルヴィン・カルザーや、舞台装置家のテオ・オットーたちといっしょに、アスコナの水浴場である砂嘴(さし)に横たわり、冬に白くなった肌を太陽であたためていた。その日は五月一日で、劇場の休みの日だった。わたしはクルト・ヒルシュフェルトがいっしょに来なかったので、がっかりしていた。わたしが新らしい契約を得て、スイスの新らしい滞在許可を得られるかどうかは、ヒルシュフェルトがリーザー支配人のところでどう話し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

てくれるかにかかっていたからである。
「もしそれがだめだったら？」
「そしたらこの人は五月八日には息子のミヒャエルといっしょに、ベルリンにもどらなくちゃならないんだ」
「考えただけでもぞっとするよ」とエルンスト・ドイッチュがつぶやいた。「もうじき戦争が起るというのに」
わたしは身を起した。「もうじき戦争が起るって、わたしこの六年間聞きどおしよ」
「この人は信じられないでいるんだよ」とローベルトが嘆きの声をあげた。「ドイツにいるもんだから、知性をすっかり褐色の霧で曇らせちゃったんだ。歌うのだってもうナチのお偉方や地区指導官相手なんだ」
みんなはわたしがハンセン氏病ででもあるかのように身をそむけた。
「もうヒトラーと知り合いになったのかい？　それからゲッベルスとゲーリングとも？」カルザーがわたしの顔を見る目は、まるで小さな子供がこれからこわいお伽噺をしてもらうおばあさんを見るような目だった。
「今までのところあの連中は、わたしのことなんかまるで目にとめていないわ」
好奇心のほうが嫌悪の気持よりも強かった。「いったいベルリンの舞台はどんなふうなの？　だれが演じてだれが演出しているの？」
「グスタフ・グリュントゲンス、ハインツ・リューマン、ハインリヒ・ゲオルゲ、ハンス・アル

バース、オイゲン・クレプファー、ケーテ・ゴールト、ヘルビガー夫妻、パウラ・ヴェッセリー、マリア・バルト、コッペンヘーファー、クルト・マイゼル、ヒルデ・ケルバー」
「あの連中はわれわれなんか全然必要としていないんだ」とエルンスト・ドイッチュがうらめしそうにわたしをさえぎった。「ベルリンには昔から、最高の俳優がいっぱいつめかけていたんだ。エーリヒ・ケストナーもまだいる？」
「昔と同じように〈カフェ・レオン〉に毎日すわってるわ。もう本は発売禁止だし、新らしい本を書くことも禁止よ。まわりを観察して、頭にいろいろ書きとめているわ」
「で俳優仲間たちは、もうみんなナチの党員になったのかい？」
「ゲオルゲとクレプファー以外は聞いてないわ」
「じゃあ何もそれが仕事をもらうための条件じゃあないんだね？」
「そんなことないわよ」
「じゃあなぜベルリンにいようとしないんだい？」とカルザーが、まるでクロスワードパズルでもあるかのように、じっとわたしの顔を見つめた。
メンデルゾンは腕をわたしの肩に巻きつけた。「前にはもう少しましな質問をしたことだってあるよなあ、カルジ」
みんな黙っていた。そしてこの沈黙の中にはベルリンへのつらい憧れが宿っていたのである。
午後おそく、わたしたちは水泳具をまとめ、みんなといっしょにチューリヒに向けて出発した。わたしのビザは、あと五日間しか有効でなかった。わたしがスイスを発ってから、みんなが言っ

ている戦争が起ったら、もう当分はローベルトのところに帰れない。ローベルトのところにいようとするなら、滞在許可――だんだんわたしが憎むようになってきた言葉だが――の延長のために、だれか声望のある人物に口をきいてもらわなければならない。わたしの場合、俳優座の幹部以外にそういう人はいなかった。姉夫妻が、もしかしたらこの際口をきけるだれかと、知り合いになっていないだろうか。

「きみ、知らなかったの？」とローベルトが驚いて聞いた。「クールマン夫妻は、自分でも外国替為輸出禁止令のために、ひどい目にあっているんだ。一月に駅前通りでお姉さんとリタに会ったけれども、牛につける鈴やお菓子や鳩時計なんか、つまり友人たちにスイスのおみやげとして持って帰れるものを満載していたよ。キュスナハトの家は売っちゃって、クールマン自身は家財を持って、ドイツへ帰る途中だったんだ」

ヒルシュフェルトがリーザーと話してくれたが、何一つ実らなかった。ローベルトとわたしも幹部事務所に出かけてみたが、これも三分でお払い箱になった。「こんな申し出をするなんて、ばかも休み休みにしてほしいものだ」リーザーの鼻めがねのレンズと入歯の陶器とが、競い合うように光っていた。「いったいおれが、慈善事業でもしてると思ってるのかい？」

あと二日だった。ローベルトの両親の家の扉はわたしたちには閉ざされたままであり、またわたしといっしょにホテルにはいるのには、ローベルトの顔がチューリヒで知られすぎていたので、結局ローベルトの友だちのハラルドが、部屋を提供してくれることになった。駅前通りでヴァレスカとわたしのまわりをとんで跳ね、ローベルトの自動車にわたしをのせようとした青年だが、

そのかつてのやせた快活な若駒が、今はどっしりとした牡馬になって、若手の医者としていかにも堂々と州立病院の精神科の中を闊歩していた。

しかしローベルトとわたしは、夜われわれの問題を論議するのに、相変らず湖畔の道を使っていた。脳細胞の創造的な活動は、体が水平であることを前提とする、というのが、いかにも共感の覚えられるタシュナーの信念だったが、メンデルゾンはまったくこれと反対なことを主張していた。女性に順応性があるのは、ほんとうに神さまのお恵みだわ、とわたしが考えたのは、ローベルトがこう言ったときである。

「いいかい。ぼくは小さな部屋にうずくまったりしながら重大な決心をつけることはどうしてもできないんだ。それには未来に向けての展望と、両足の動きとが必要なんだ」

湖畔ではその両方が与えられていたが、インスピレーションは湧いてこなかった。劇場の光はもう消されていた。最後の観客も散って、チューリヒの法定閉店時間によってとうに人気のなくなっているあたりの道路に、聖マリア聖堂から、十二時の鐘がひびいてきた。

「ほんとうに偉大な恋人たちは、いつでもいっしょになるのに苦労したんだよ、レアンドロスとヘロ、トリスタンとイゾルデ、ロメオとジュリエット、ルードルフとミミを考えてごらん。ぼくたちとまったく同じで、どの場合も抵抗の大きさが愛の偉大さを高めたんだ。しかし、たったひとつだけぼくたちの方が連中に先んじられるものがある。二つの王家の均衡が破れたり、伝統が傷つけられたり、戦争がひき起されたりすることなしに、ぼくたちは結婚できるからね。きみがこれに関してスイス人にイエスと言えば、その瞬間にきみはもうスイス人だ。だれももうきみを

ぼくの傍らから引き離すことはできないよ」

言われてみればそのとおりだったが、これはけっしてわたしの思いつくことではなかった。結婚という言葉は、一度も話の中にはいりこんできたことはなかった。わたしたちの話がどんなに愛情にあふれ、未来に対して欲深いものであった場合でも、まったく変りがなかった。

「この申し出は気に入らないかい？」申し出が生れてしまった以上、ローベルトも頭と足を休ませることにして、ベンチに腰をおろすのだった。

「あまりすごい英雄主義なので、声が出なくなっちゃったわ」

「こうなったらもう、英雄主義をけちることはできないと思ってね」

わたしたちは笑い、湖畔の散歩道を離れて、ハラルドのベッドにもぐりこみ、開けた窓から星のまたたく空を眺め、ほかの恋人たちがとうに気づいているであろうこと、つまり、空気の中にリラやジャスミンの香りがただよい、今や五月であること、恋の月であることによりやく思いあたるのだった。

つぎの朝わたしは、俳優座の小さな事務所で、ヒルシュフェルトと向い合っていた。

「ローベルトはアスコナで結婚したいって言うの。それで今朝準備のために、先に出かけたわ。あなたとカルザーには証人になっていただきたいの」

ヒルシュフェルトはわたしの肩ごしに、まるではじめて見るかのような目つきで、ゲーテ氏の胸像を見つめていた。そしてゲーテを見つめたままこう言った。

「それが何を意味するか、自分でよく考えてみたかね。こんな時代にユダヤ人の名前をもらい、

きみもきみの子供たちもヒトラーあるかぎりドイツに帰れないばかりでなく、まるで好きこのんで、追われたり憎まれたりしている難民の流れの中にはいっていくんだぜ。ヒトラーの奴が、軍と将軍たちを動員できるようになったら、奴がそれでも中立国の国境を尊重するなんていう保証はどこにもないんだ。『突撃隊』という新聞を読んだことがあるかい？　なかったら一度読んでごらん。そうすればアーリア人種でない人間に、どんな運命が待ちうけているか、きみにも分るよ」

あられと氷の粒が、こめかみのうしろと胸の中で、ずきずき痛むといった感じだった。耳に両手を当てて聞くまいとしたが駄目だった。立ちあがって出てゆくこともできなかった。

「明日までよく考えてごらん、ヴィルキ。情熱はいつでも理性よりも二歩早い。とにかくわたしはアスコナに行き、ローベルトにも思慮のない決心をしないように忠告するよ」

「忘れないで伝えてちょうだい。わたしがいつかは彼の申し出を受けに戻ってくるだろうって」

ほほえもうとしたがそれもできなかった。合法的にローベルトのそばにとどまるというチャンスが、たとえ永遠にではなくとも、今さしあたっては失われてしまったことをわたしは感じていた。

アルプスすみれ

赤いビロードが気に入らないので、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com